



中岡 成文 教授

文学研究科文化形態論専攻臨床哲学専門分野
文学部倫理学専修

こんにちは。私は、なかおか・なりふみ、と言います。出身地は山口県の岩国市です。私が生まれたのは 1950 年ですが、その 5 年前からアメリカ軍（正確には海兵隊）が岩国に進駐していました。いまでもアメリカの基地があります。地元の人たちのアメリカに対する感情は必ずしも悪くありません。それが沖縄とちがうところですが。ただし、基地が大きな争点になることは変わりありません。前の岩国市長（たまたま私の小学校の同級生でした）は、アメリカの基地に対して厳しい態度をとっており、日本政府と対決していました。新しい市庁舎の建設に対して、彼が市長のあいだ、政府の補助金は凍結されていました。彼が選挙に敗れ、アメリカ軍容認派の現市長が就任したとたん、凍結は解除され、ガラス張りのりっぱな市庁舎がたちまち実現しました。多少の事実誤認も混じっているかもしれませんが、それが岩国出身者の一人である、私の認識です。

中学校と高校は、国鉄（いまの JR）に乗って、広島市にあるカトリック系の学校に通いました。広島は、みなさんご存じですね？ ここで多くのアメリカ人の神父さんたちに出会いました。少数ですが、スペイン人の神父さんもいました。私は彼らから英語を（スペイン人からはスペイン風の英語の発音を）学び、英語のスピーチ・コンテストに出場しました。高校 2 年生のときは、ある全国大会で優勝しました。英語の上達のために、学校に行く前に、「赤毛のアン」のシリー

ズを原書で読んだ時期もあります。

それほど英語とのつながりは深かったのですが、並行して、中学校 3 年生のときから、ドイツ語の勉強も始めていました。NHK ラジオでドイツ語講座を聞いたのです。大学の文学部に入って、ドイツ語を第一外国語とするクラスを選びました。その後もいろいろあったのですが、ヘーゲルを中心とするドイツ哲学を専攻することになりました。大学院に入った年（1973 年）、古典ギリシア語の勉強に集中するほか、夏休みにはドイツのハイデルベルク大学の夏期講座に参加しました。しかし、その時の私はまだほとんどドイツ語を話すことができず、みじめな気持ちを味わいました（再びドイツの土地を踏む勇気が出たのは、その 10 年後、妻や子どもとともにでした）。その年はまた、オイルショックが起こり、トイレットペーパーがなくなった年でもありました。

さて、自己紹介と昔話ばかりしてしまいましたが、いまの私は、文学部の国際連携室で「留学助成部門」の仕事をしています。日本人の学生たちに海外で勉強してもらうためのサポートですね。グローバルな時代には、やはり、英語で自分のこと、自分の文化のことが語れるようになってほしいので、英語でプレゼンテーションできる能力を育てるお手伝いをしたいです。他方、中国からの留学生が私の研究室におられることもあり、中国語などアジアの言葉をわかるようになりたいとも思っています。

文学部・文学研究科 国際連携室

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kokuren/index.html>

国際連携室では、年間を通じて様々な行事やプログラムを実施しています。留学生だけでなく、文学部・文学研究科の学生が参加できる行事もあります。

2012年度には以下の行事を実施しました。（*は留学生のみ対象）

- **新入留学生オリエンテーション*** 新入生を対象としたオリエンテーションです。それぞれの開催日に参加できなかった新入生には、後日個別説明を行いました。
 - 4月6日（金）博士後期課程1名、研究生22名（研究科7名、学部15名）
特別聴講学生7名（研究科1名、学部6名）
 - 10月1日（月）特別聴講学生4名（Erasmus Mundus 留学生、研究科4名）
 - 10月3日（水）研究生9名（研究科1名、学部8名）特別聴講学生11名（研究科9名、学部2名）
特別研究学生2名（研究科2名）
- **派遣学生募集（部局間協定校・追加募集）** 4月2日（月）～27日（金）
- **短期英語研修への参加募集** 4月から5月上旬にかけて、グローニンゲン大学、マヒドン大学での語学研修プログラムへの参加学生を募集しました。
- **チューター説明会** 留学生をはじめ担当するチューター学生を対象とした説明会です。
5月11日（金）と10月24日（水）に開催。当日に参加できない担当者へは個別に説明の機会を設けました。
- **ランチタイム交流会** 5月24日（木） 昼休みに中庭会議室で開催。
- **浴衣教室** 7月5日（木） 昨年の「着物体験教室」に続き、「浴衣教室」を開催。着付けの先生方により、浴衣を本格的に身に着け、帯や飾りなどは留学生の好みに合わせて華やかに仕上げていただきました。
- **派遣学生募集（部局間協定校・本募集）** 9月3日（月）～28日（金）
- **Erasmus Mundus 派遣奨学生の説明会** 10月18日（木）に説明会を開催。本プログラムでの留学経験者やプログラム担当教員の De Jong 先生にもご出席いただき、本プログラムについて詳しい説明を聞く機会となりました。応募学生の募集は10月22日（月）～11月9日（金）。面接選考を経て派遣学生を推薦しました。
- **お琴と尺八のコンサート** 11月15日（木） 大学会館 アセンブリーホールで開催。
音楽学研究室が主催し、国際連携室の共催で演奏会を開催しました。
- **親睦パーティ** 例年12月の第1木曜日に開催していますが、2012年は少し早めに11月29日（木）に、カフェテリア「らふおれ」で開催しました。学生だけでなく、教職員も一堂に会するこのパーティは、今年で32回目を数えます。今年は留学生の司会者の進行により、留学生による歌、阪大のサークルによるバンド演奏、アカペラ、ゲームなどを楽しみました。
- **着物体験教室** 12月6日（木）中庭会議室で開催。
好みの振袖を選んで着つけていただき、思い思いのポーズで写真におさまりました。
- **ことばの教室 英語セミナー** 留学生を講師役に、語学学習や現地での事情を学ぶ教室です。
Barbara Carter さん（博士前期課程）を講師として、2月5・7・12・14日に英語セミナーを開催しました。
e-mail や履歴書の書き方などについてのヒントを教わりました。
- 今年度の実施案内はHPやポスターなどでご確認ください。
留学プログラムや留学派遣学生の募集情報はHPやKOANを通じてご案内します。

留学体験記

語学研修

- 渡川和子さん（派遣時 学部 1 年）
短期語学研修プログラム モナシュ大学春期語学研修プログラム
（国際交流科目「オーストラリア異文化体験演習」）

海外派遣プログラム

- 佐藤由隆さん（派遣時 学部 3 年）
OVC プログラム * 横断的研究視察 台湾

交換留学

- 祖川明子さん（留学時 学部 4 年） ハイデルベルク大学（部局間交流協定校）
- 黒川ひろさん（留学時 学部 3 年） マンチェスター大学（部局間交流協定校）
- 金城未来さん（留学時 博士後期課程 3 年） 台湾師範大学（部局間交流協定校）

留学生

- 張美さん 交換留学生
- Mohammad Moinuddin さん 博士後期課程

モナシュ大学研修の思い出

1 回生の春休みに、モナシュ大学研修に参加しました。プログラムの概要は、オーストラリアで 5 週間ホームステイをしながら、モナシュ大学で英語研修を受けるというものです。大阪大学だけでなく、一橋大学、名古屋大学、九州大学といった全国の 7 つの大学から学生が参加していました。参加しようと思ったきっかけは、大学入学時から長期留学に興味があり、そのために海外に慣れたかったからです。今まで海外経験がなく、一人で長期滞在するのは抵抗がありましたが、このプログラムは大阪大学の学生たちと一緒に安心してし、奨学金が出たので自分で手配するよりも経済的に負担が少なかったことが大きな決め手でした。

● 比較文学専修 2 年 渡川 和子

この研修に参加することで、色々なことを経験し、成長することができました。まず、参加するきっかけとなった「海外に慣れる」という目標ですが、5 週間、現地での生活を体験することで達成することができたと思います。印象的だったのは、滞在 2 日目で、バスに乗り間違えてしまったことです。英語は話せないし、乗客も全員現地の人たちばかり。運転手の方に拙い英語で乗り間違えたことを伝えて、なんとか家に帰ることができました。このように、英語を使わないと生活できない、といった経験は海外でないとできません。このおかげで、ミスを気にせずに英語を話す度胸がついたと思います。二つ目に、日本全国の学生と友人になれました。

4

200人近くの学生が参加しており、大学や学部の垣根を越えた、意識の高い同世代の学生達との交流は私にとって大きな刺激になりました。私が滞在した時期はちょうど東日本大震災の1年後だったので、一部の学生は震災について現地の学生と話し合うといった企画を立ち上げており、海外に来て浮かれているだけの自分と違い、グローバルな視点で活動している姿にひたすら感心していました。授業は基本的に午前中だけだったので、放課後は友人と買い物をしたり、週末は一緒にツアーに参加したりしました。帰国後、他大学の友人とはなかなか会えませんが、長期休暇を利用して遊びに行っています。一生ものの友人ができました。三つ目に、異文化交流ができました。モナシユ大学には Japanese Culture Club という日本文化に興味がある学生が集まるクラブがあり、そこで開催されるイベントに参加して、現地の友人を作ることができました。また、ホームステイ先にコロンビアからきた20代の夫婦が滞在していたのですが、いつも笑顔で、“How are you, Wako?” と話しかけ

てくれました。私も彼らもあまり英語ができなかったのですが、身振りや筆記を通してお互いの文化について話しました。私がホストマザーと喧嘩して落ち込んでいると、Google 翻訳を使いながら慰めてくれました。本当に素敵な人たちで、言葉や文化が違ってても、笑顔と優しさは伝わるんだなあと思いました。

反省点としては、もっと英語を勉強していけば良かったです。コミュニケーションがうまくできず、ホストマザーとあまり話をする事ができませんでした。また、せっかく一ヶ月もいるのだから、たくさん旅行するべきです。ガイドブックは、読むだけで歴史の勉強になりますし、お金の種類など生活に必要なことが書いてあるのでぜひ持っていきましょう。

英語力だけでなく、人間的にも大きく成長できた5週間でした。長期留学を視野に入れて人にはびつたりのプログラムですし、留学に興味がない人でも、思い出作りや文化交流のために気軽に参加して欲しいと思います。



OVC・横断的研究視察プログラム体験記*

● 中国哲学専修3年 佐藤 由隆

当該研究視察においてこのたび、台湾に向かうということを知りましたのは、その年の春のことです。日々ご指導を賜っております湯浅先生より、是非とも応募してみてもどうか、とお勧め戴いたことがきっかけでありました。台湾。中国哲学の道に憧れ、志さんとする私にとりまして、ともすれば今後何度も赴くことになるやもしれぬ地であります。見聞を広めるにはまたとない機会だ、と思いました私は、友人とともに説明会に参加することに致しました。

しかし学問の道において、未だに西だと思っ

明会で頂戴しました申請書には氏名や専門分野の他、研究テーマおよび訪問目的、そして自身の研究の意義と予想される成果を書くべし、という欄が設けられておりました。私の友人は、それで尻込みをしてしまいました。研究テーマすらぼんやりとしか構想していない学部三年のヒヨコは、自立という初歩の初歩すらままならぬ段階なのであります。それでもこれは逃してはならぬ機会だ、という直感に突き動かされるまま、私は半ばでっちあげるようにして申請書を作成して提出し、面接にて散々お叱りを受けることとなりました。そんな私が視察メンバーに採用されましたのは、今なお首をかしげて

いる点であります。

さて、ヒヨコは当惑致しました。まさかあのでっちあげのまま台湾へ行くことなど、許されるわけがないからです。近い将来に対する途方もない不安に押し潰されそうになりながら修正を試みているうち、しかし段々と、でっちあげはでっちあげでなくなってゆきました。特に自身の研究テーマと向き合った時、自分がまず卒業論文において具体的に何について考察してゆくか、ということが、このことを通して見えてきたのであります。ほんやりと「いずれやってみたい」と思っておりましたことが、ここに来て「今やってみたい」ことに変化したのであります。これはヒヨコにとって大きな前進でありました。研究者の「け」の字も心得ていない学部生を採用された意図は、もしやここにあるのではないかと、恐れながら拝察致します。

こうして一人、学部生として参加させて戴きました私は、初日以外は基本的に単独で資料調査に赴きました。自身、初めての海外渡航であります。言語の異なる見知らぬ土地にて、拙い中国語を駆使し、時には事前の準備も特にせず体当たりで単身交渉に臨みましたので、どう足掻いても逃れられない状況に何度も直面致しました。自らが行動せねば、何の成果も得られないのです。これは今後、何度も向き合わなければならぬことであると存じますので、このような得難い形で体験させて戴きましたこと、誠

に有難く存じます。中でも、試行錯誤して自分の意図がようやく相手に通じた時、またそのようにして思った以上の成果となる資料を獲得できた時の達成感は、何物にも代え難いものであります。

しかしこのようなことが可能となったのも、引率の片山先生による事前の厳しいご指導、またヒヨコの私を温かく受け入れてくださった諸先輩方という心の支えあってこそであります。交渉の場では一人でしたが、けれどもじつは一人ではない、皆様に支えられた自分であるのだということを感じて臨めたこと、これこそが本プログラムにおける大変な長所であったと存じます。この経験は、是が非でも今後活かさねばならぬものであると心得ております。

一つ、非常に心残りでありますのは、日曜日に中央研究院の近くで開催された地元の祭りに、疲労により終日自室で寝込んでいた私だけが参加できなかったことであります。大変貴重な交流をされたそうで、ある先輩は祭りの最中、「佐藤くんも来ればよかったのに」と何度もおっしゃったそうですが、誠にその通りでありました。臍をかむ思いであります。

*OVC プログラムについて

OVC とは平成 22 年から 25 年にかけて実施された「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」An overseas visiting program complex for multilingual and multicultural studies の略称です。大阪大学文学研究科が日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に申請し、本プログラムが採択されたことにより、総数約 140 名の若手研究者等（講師、助教、ポスドク、大学院生、学部学生）を国外の研究機関等に派遣しました。

本プログラムは A. 横断的研究視察、B. 共同プロジェクト、C. 個人リサーチという 3 つの派遣タイプから構成され、佐藤さんは平成 24 年度に実施した「横断的研究視察」で台湾派遣グループに参加しました。



中央研究院學術活動中心（写真提供 佐藤由隆さん）



ドイツでの日々

ドイツから日本に帰ってきてから、約半年が経ちました。改めて振り返ってみると、四回生の前期に留学するという思い切った決断だったと思います。卒業論文と大学院試験の準備はドイツでしなくてはなりません。また、帰国してからは教育実習もありました。一つ一つの課題をこなしていくのは想像以上に大変でした。

それでも、留学に行くことは私の人生において最良の決断であったと思っています。一番の理由は、やはり語学力に自信がついたことです。ドイツ語には少しずつ慣れていきました。最初の一カ月は語学学校に通っていましたが、他の留学生のドイツ語と自分のドイツ語を比較しては毎日惨めな気持ちになりました。ブラジル人のクラスメイトが、私の ich の発音がおかしいと言って練習に付き合ってくれましたが、有難さと悔しさが半々でした。心の支えは朝ご飯に支給される美味しいドイツパンとコーヒーで、それだけが楽しみでした。ドイツ語ができるようになってきたと感じたのは、4カ月経った頃です。リラックスして話せるようになり、課題の作文でも考えたことを表現できるようになりました。哲学の議論についていくにはまだまだですが、自分の疑問や興味関心を言う事はできるようになりました。

留学の成果はドイツ語だけではありません。自分で言うのもなんですが、私は本当にタフになりました。留学中は常に、周りに流されず自分に必要なことを見極めてそれを実行しなくてはなりません。前述の通り、私にはするべきことがたくさんありました。留学生には楽しそうな誘いがたくさんありますが、それを断らなくてはならないことも度々でした。せっかく外国に来ているのに、机に向き合っただけ

● 哲学・思想文化学専修 4年 祖川 明子

でもったいないことをしているのではないかと考えたこともありますが、勉強のために来たということを最後まで貫くことができ良かったと思います。ただ、最後にパリに旅行に行ったのは素晴らしい経験でした。そのときには、次回はお金と時間に余裕を持って来ようと思いました。

一生懸命頑張っていると、多くの人が助けてくれました。銀行の口座の開設、寮での生活、図書館で文献を探すことなど、日本では簡単なことでもドイツでは一苦勞です。できるところまでは自分でやり、それでもできないことを人に頼るのは悪いことではないことだと感じました。快く力を貸してくれた人たちに心から感謝しています。

大切な友達もできました。試験前には毎日一緒に図書館で勉強し、休憩時間にはカフェであらゆることを話しました。また彼女は出身の村のお祭りに誘ってくれ、家族みんなに私を紹介してくれました。大学では殆ど感じませんでしたが、そこでは自分が外国人であることをこれでもかというほど感じました。貴重な体験でした。

他の日本人留学生からも多くの事を学ぶことができたと思います。同じドイツを留学先として選んでいても、考えていることは様々です。たまに励まし合い、日本について話すことはとてもいい刺激になりました。

日本から遠く離れた場所で、人々が生活を営んでいるということは事実として誰でも知っています。しかし、それを目の当たりにして、更にその中に溶け込もうと努力することはまた違うことです。その体験を通して、自分の中で様々な変化が起きます。この世界には本当にいろいろな人がいて、自分もそのなかの一人なのだ

実感しました。大げさかもしれませんが、本当の自由を感じたのは生まれて初めてでした。

これからも私は日本で失敗することがあるか

もしれません。その時は、ドイツで失敗しながらも一歩ずつ進んでいたことを思い出して、挑戦し続けようと思います。



留学という選択

留学は今の時代では多くの学生が挑戦してみたいことだと思います。私も大学入学してから同じ夢を持ちました。しかし、ただ漠然と留学してみたいと思うことから実際に留学を実現させることに変えるのはとても大変だということを、厳しいかもしれませんが、これから留学を目指すみなさんに知ってほしいと思います。なので、ここでは私が経験した留学に関しての楽しさとともに困難だったことも書きたいと思います。向こうでどんな活動したか記すこともありだと思いますが、みなさんが知りたい留学を実現させる私なりの考えを中心に書きたいと思います。

2011年9月から約1年間、私はマンチェスター大学へ留学しましたが、留学といえば色々な方法があります。自費留学もあれば交換留学もあります。短期留学もあれば長期留学もあります。しかし、私はあえて大学生の方たちには1年の交換留学に挑戦してほしいです。それは1点目として金銭面の問題、2点目として留学そのものの目的の理由があります。一般的に留学するといった場合、国によって様々ですが、出費について、それなりの覚悟や準備が必要です。この点で交換留学では、授業料は在籍大学の授業料で済むのです。2点目に関してですが、みなさんは何のために留学に行くのでしょうか。英語力をアップさせるためでしょうか。それでしたら私は日本の語学学校に行くことをお勧めします。語学学校のほうがよっぽど安く充実した授業を提供してくれます。つまり私が言いたいのは留学に行くのなら、それなりに準備をしないとい

● 西洋史学専修 4年 黒川 ひろ

けないということです。留学に必要な英語の基準点を取っても私は最初すごく苦労しました。課題の量が多すぎて連日徹夜しましたし、クラスのディスカッションにもついていけませんでした。しかし、それでもイギリスの大学で実際に一学生として授業に取り組んだことは私にとって誇りになりました。英語力の向上目的で留学した場合、時間はあっという間に過ぎてしまいます。英語のためだけに留学するなんてもったいなくありませんか。

さて、実際に留学をしようと思ってからどうするべきかに移ります。基本的に、募集締め切りは留学する年の1年前であることを念頭に置いてください。この時点であきらめる人が多いのですが、私が知ってほしいのは留学実現には計画性と積極性が必須項目であるということです。交換留学をするには2年計画がベストです。2年前から1年かけてひたすらTOEFL(留学用の英語テスト)の勉強をしてください。そして規定点数を獲得した後は、出願書類の準備、ビザの準備、出発の準備へと移っていきます。これらの準備で大学に頼ることはできません。自分で必要な書類を準備し、必要な情報を自分から取りに行く姿勢がなければなりません。厳しいことを言っていますが、この姿勢は留学してからも大切ですし、なにより留学をするのは自分なのだから自分でするのが一番納得できます。これらを乗り越えて留学した場合、留学先でもある程度の問題に対処できるようにもなるので、みなさん自分の留学は自分で実現させましょう。

最後に、交換留学で得られるものについて触

れておきます。実際に留学した人しかそんなもの分かるわけないと言われてしまえば、もう何も言えないのですが、一応私なりの答えを書いておきます。一言でいえば、「生きる力」です。マンチェスターでの日々の勉強や生活を通して、基本的にちょっとしたことで動じない自信がついたと私は言えます。留学を1年もして、それだけのことかと思うかもしれませんが、これからの人生で起こりえることを自分なりに乗り越えていくのは、とても大切なことです。よく自分らしさと言いますが、自分の生き方がまさにこれに繋がるのだと思います。今、これを読んでいる人は少なくとも留学に興味を持っている人だと思いますが、それを単に行ければいいと思うか、実現させると決心するか、私に

とやかく言う権利はありません。しかし、決心した人がいるのならば某塾講師で有名なこの言葉を送りたいと思います。「じゃあ、いつやるのか。今でしょう!!」



クラスメートと湖水地方へ遠足（筆者は一番右）



留学生活を終えて

私は2012年2月から6月までの約5ヶ月間、台湾師範大学へ留学しました。私は、これまで、中国で新たに出土している竹簡（竹の札）に記された文献を用いて、中国古代思想史を描き出す研究を行ってきました。台湾師範大学の文学院では、毎年、様々な古代思想史関連の講座が開かれるだけでなく、私の専門とする新出土文献に関する討論会や講演会が頻繁に行われています。そのため、広範な知識を得つつ、専門分野について、現地の研究者と様々な意見交換ができるのではないかと考え、台湾への留学を決意しました。

台湾師範大学では、語学を中心とする講座や、中国思想史上重要なテーマである「気」と「性」に関する講座、中国の古典（孔子や孟子などの先秦諸子に関わるものから、成語のもとになった有名なエピソードに至るまで様々）を読み、平易な現代中国語で翻訳・報告する講座等を受講しました。

● 中国哲学 博士後期課程3年 金城 未来

台湾における授業では、日本以上に自らの意見を求められることが多く、またそれに加え、パワーポイントを用いた口頭発表やレポート提出を日々こなさなければなりません。渡航直後は慣れないことばかりで、何をすることも時間がかかり、予習や発表準備のために、睡眠時間を削ることもありました。

しかし、これらの授業を通して、関心を異とする現地の学生の発表に触れ、日本で学ぶだけでは気が付かなかった問題意識や研究視角を得られたことは、大きな収穫です。

また、留学期間中に師範大学で行われた研究会（出土文献文字與語法讀書會與簡帛資料文哲讀書會合辦讀書會）や、中央研究院で開催された「第四屆國際漢學會議」（出土材料與新視野）に出席することができたのも、良い経験となりました。研究会では、古文字の専門家が一字一字を詳細に解説した上で、原文をどの文字として解釈すべきかについて出席者全員で議論した

り、新出土文献に関する先行研究を取り上げ、その是非について論ずる機会を得ました。また、漢学会議には、台湾はもちろん、中国大陸やアメリカなどからも多くの研究者が集まり、様々な研究発表を行っており、彼らとの交流を通じて、出土文献に関する最新の情報を得ることができました。

休日には留学先の友人と故宫博物院や中央研究院、国父紀念館に出かけたり、大学で開催されている「水餃子作り」の行事に参加するなどして、台湾の文化や歴史に触れることもできました。また、北京や武漢出身のルームメイトと、学術に限らず、文化や生活・趣味に関する話題を夜遅くまで語り合うこともありました。初めのうちは、相手の話す言葉を十分に理解できないことも多くありましたが、次第にその内容をはっきりと理解することができ、冗談も言い合えるようになりました。帰国した今でも、友人との

交流は続いています。

此度の留学を通して、単に書物を捲るだけでは得ることのできない、生きた言葉や文化、生活を直接肌で感じることができました。今後もこの経験を活かし、国際社会での活動を視野に入れて、専門研究を進めていきたいと考えています。



まおこん
猫空の茶店にて（筆者は一番右）

阪大生になりきれたのかなあ？

● 韓国 全南大学(特別聴講学生) 日本文学加藤洋介教授 受入れ 張 美

アニメのキャラに憧れた私は「あの子たちは元々日本語で話しているよ」という母の言葉から日本語に興味を持ち始めました。独学から始めたのですが最初は上手くいきませんでした。しかし英語の勉強をしてみたら、ほぼ語順が一緒の日本語のほうが伸びることがすぐ分かってきてどんどん楽しくなり、高校のときは日本語の勉強に夢中。いわゆる「日本語バカ」でした。

日本語学校にも行きましたが独学の時間が長く、なかなか日本語で話す機会がありませんでした。高校で日本語能力試験1級を取得したものの、日本人と話すとなると言葉は出てこないし、アクセントもおかしかったです。それで大学を休学し日本に語学研修に行くことを決め、金沢で1年間日本語の勉強をしていました。

金沢での生活が楽しくてあまり韓国の大学に

戻りたくありませんでした。それで前期だけ登録して後期からは神奈川のある大手ホテルでインターンシップをしていましたが、2011年3月の東日本大震災のため急遽帰国しました。韓国は3月から学期が始まるので学校に戻ることができず、その間は日本の大学への編入の準備をしていました。その中、高校のときからの念願の大阪大学への交換留学生として合格し、2013年の2月まで大阪大学文学部で勉強することになりました。

1年半日本に住んでいたのも日本語で困ることは多分ないと思っていましたが、いざ授業に参加してみると本当に大変でした。すごく集中しても半分も聞き取れない授業もありました。これからの生活が心配でありませんでしたが、時間が経つにつれていろいろな人と交流をすること

で、少しずつ大阪での生活を楽しめるようになりました。勉強も大事ですが、1年という時間はいろんなことができるので勉強以外のことにも頑張ってみたかったです。それでサークルに入り、バイトも始めました。

頑張っていたおかげで様々なチャンスに巡り合えました。私が入っているサークルの大阪大学生協学生委員会では共済に関わる仕事をしています。夏休みには共済セミナーに参加し、全国から集まった学生たちと交流をすることができました。また、石川県で行われた留学生向けのプログラムのジャパン・テントに参加し、全国の留学生に会いました。

後期はサークルの仲間といちよう祭にブースを出しました。「秋の健康フェスタ」というタイトルで、来場者に健康に興味を持ってもらえるようなイベントを行いました。私たちが主体となり企画を立て団体との交渉をするなど、ちょっと社会人みたいなことをやっていました。準備する段階では企画書を書くことに苦戦していましたが、今は慣れてきて早く書けるようになりました。また、任されたことを後にせず、集中してすぐにする習慣も養われました。

履修した授業は、前期は国語学、会話分析、

第二言語の学習と使用といった日本語に関する授業と、アートメディア系の授業です。後期は文学部の授業は国語学、博物館学、日本文化学で、他学部の授業は日本政治史、日本国憲法、ビジネス日本語、多文化コミュニケーションです。前期は自分の興味を優先しましたが、後期は日本に関する知識を深めるといった目標を持って授業を取りました。

授業のグループ発表では国籍の違う学生たちと1つのテーマについて話し合い、発表の準備をする機会がありました。逆にほとんどが日本人の授業の発表準備もありました。日本人と他国の人の言い方や考え方の違いを発見していくことが楽しかったし、これからもその差異を認めながら理解し合えるようになりたいと思いました。まだまだ学んでいくことはいっぱいありますが、大阪大学文学部で交換留学生として過ごした1年間は自分の夢の大きな礎となってくれました。今の私はなりたい自分になったという確信さえ抱いています。この経験を活かして韓国と日本の架け橋、ひいては世界に羽ばたく人に成長したいです。私と関わりを持った阪大のみなさん、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。



I, Me and Osaka!!!

● 日本文学 博士後期課程 3年 **Mohammad Moinuddin**



Being a student of Japanese Literature, I

should have written this piece of writing in Japanese and I would have loved to do so, but I was intentionally asked to write in English.

An enthusiast of Mathematics and a lover of playing with arithmetical calculation, I had never imagined that I would be making my career in literature and moreover in a foreign literature. I must confess that I never liked literature until I enrolled in to the university. I always enjoyed solving the arithmetical prob-

lems in different ways to find a way to solve it in shortest time. But presently, no work gives me as much joy as I get while analyzing a piece of literature. Someone has rightly said that at the end destiny drives your life.

My journey in Osaka University has been pretty exciting, and enthralling experience. I owe my gratitude towards my host family (introduced by the International students' help desk of the university), very kind staffs as well as supervisor and one and all. Being the first ever Indian foreign student as well as Phd researcher in the Department of Japanese Literature and History of Japanese Language and Linguistics at Osaka University, has not only been an honor for me but also a great sense of responsibility. The department has given me ample opportunities to nurture my skills. I cannot express the feeling that I got when my first research paper in Japanese language was published in an academic Journal in Japan. Undoubtedly, it was not possible without the proper guidance.

I have learned many things during my stay in Osaka that in many cases directly influenced me as an individual. The way they follow traffic rules and teach their children to do the same. Moreover, the most fascinating aspect is when you find a pet dog standing at the traffic light

waiting for green light to cross the road. Another aspect that exerted me is the mode of volunteer work carried out by many native people. It influenced me so much that I decided to contribute my bit; as a result I joined hands with the volunteers at Minoh city to cooperate with editing of the "Minoh Post", a monthly bulletin that publishes important information for foreigners. I also got a chance to volunteer as a Japanese Language teacher at shikiji nihongo kyoshitsu (Reading and writing Japanese language classes) at Ibaraki city of Osaka Prefecture. This place will always be in my memory, as they encouraged me to write something in Japanese Language for a competition. The theme was "Human Rights and Discrimination". Very tough! But being a part of the team I had to participate.

Interestingly they also gave opportunity to my student who was a teacher from America, at an international school and a professional painter. I attempted to write a sanbunshi (a prose in a poetic style also known as 'Prose Poem'). It was the best moment for me when my first and only piece of literary work was not only selected to send for the competition but it also won a prize for me. Just have a look on that work.

偉いって何？

あらゆる生物の中で一番偉いと人間は自惚れる。
が、その人間同士で、数え切れないほど差別しあう。
他者の存在を我慢できずに、ただ自分が一番偉いと自惚れる。

動物や

植物だって生物だ。

人間よりもいろんな種類があつて、同じ自然の中に暮らし、そして喧嘩し争い合う。

彼らは自分の生存のため、他を殺すことさえある。けれども、差別はしない。

人間は相手を殺さなくても差別する。

同じ人間であるのに、話すことさえ嫌がったりする。

それなのに、自分が一番偉いと自惚れてばかりいる。

偉さを決める基準は、いったい何なのだろう。

差別することなのか、差別なしの生活をする事なのか。

差別することが偉さの基準なら、私は偉くはなりたくない。

動物や植物になつたって構わない。

争いがあつても差別はされない、差別なしの人生を味わえる、

そんな世の中を、私は作りたい。

I thank the Almighty for sending me to _____ to Osaka University.
this marvelous place, i.e. Osaka and moreover

学生の派遣・受入れのデータ

学生海外派遣 (2013年2月15日現在)

学部 12名

在籍学年		渡航先			
3年	6	イギリス	5	ドイツ	2
4年	6	アメリカ	3	オーストラリア	1
				韓国	1

研究科 22名

在籍学年		渡航先					
後期3年	11	オーストラリア	3	チェコ	2	カナダ	1
後期2年	2	ドイツ	3	ベトナム	2	タイ	1
前期2年	7	アメリカ	2	中国	2	フランス	1
修士2年	2	イギリス	2	インドネシア	1	台湾	1
				オーストラリア	1	韓国	1

留学生受入れ (2012年4月から2013年3月まで)

研究科		研究生		9		出身国・地域		ポーランド		2	
博士後期課程	31	特別研究学生	6	中国	50	アルゼンチン	1	3年	19	韓国	28
2年	8	特別聴講学生	14	台湾	11	インドネシア	1	1年	4	ドイツ	9
博士前期課程	20	学 部		アメリカ	5	カナダ	1	2年	8	ロシア	4
2年	8	4年	3	ブラジル	3	シンガポール	1	1年	12	フランス	3
1年	4	3年	2	イタリア	2	スペイン	1	特別聴講学生	7	インド	2
修士課程	7	1年	2	オランダ	2	スロベニア	1	2年	4	タイ	1
2年	4	1年	2			ベルギー	1	1年	3	マレーシア	1
1年	3	研究生	23			メキシコ	1			ラトビア	1
		特別聴講学生	14								

在籍専門分野・コース、専修

	研 究 科					学 部			
	博士後期	博士前期・修士	研究生	特別研究学生	特別聴講学生	学 部	研究生	特別聴講学生	
現代思想文化学		1				哲学・思想文化学	1		
臨床哲学	2			1		倫理学	1		
日本学	8			1	4	日本学	1	1	1
日本史学	1	5	1			日本史学			
東洋史学	1	1	1			東洋史学		2	
西洋史学					2	西洋史学			
考古学						考古学		1	
人文地理学						人文地理学			1
日本文学	9	3	1	4	1	日本文学		5	3
比較文学	2					国語学		1	2
中国文学			1			比較文学		2	
国語学	2					中国文学		2	2
英米文学	1					英米文学	1		
日本語学	2	8	1		2	日本語学		3	4
美学	1	1				美学	1	2	
音楽学	1					音楽学			
演劇学		1	2			演劇学		1	
美術史学	1		1		1	美術史学	1		1
共生文明論	-	2				共生文明論	-	1	
アート・メディア論	-	2				アート・メディア論	-	1	
文学環境論	-	3	1			文学環境論	-	1	
その他					4	未配属	2		
	31	27	9	6	14		6	23	14

教員の海外渡航・受入れのデータ

教員海外渡航 (2013年2月15日現在)

海外出張 延べ111名、126件

中国	23	カナダ	3	イラン	1
韓国	15	スウェーデン	3	カンボジア	1
アメリカ	13	オーストリア	2	シンガポール	1
ドイツ	13	オランダ	2	チェコ	1
イギリス	8	スペイン	2	チリ	1
イタリア	7	トルコ	2	ノルウェー	1
台湾	6	フィンランド	2	南アフリカ共和国	1
タイ	4	ブラジル	2	メキシコ	1
インド	3	フランス	2	ヨルダン	1
オーストラリア	3	アラブ首長国連邦	1	ロシア	1

海外研修 延べ15名、18件

タイ	3	ドイツ	2	スイス	1
アメリカ	2	オランダ	1	中国	1
イギリス	2	カナダ	1	トルコ	1
台湾	2	韓国	1	フランス	1

教員受入れ

■ 外国人招へい研究員 (2012年4月から2013年3月の受入れ)

- チン フェンキ
1. 陳 文輝 (Chin Wenhui) 中 国 2010年10月1日～2013年9月30日
在外白話文学資料の調査、ならびに元朝期戯曲文学の共同研究 (高橋文治教授受入れ)
- ソン ナ
2. 孫 娜 (Son Na) 中 国 2011年9月1日～2012年8月31日
日中漢語の対照研究と歴史研究 (金水敏教授受入れ)
- アレクサンドラ クリスティーナ ローダー
3. Alexandra Christina Roedder アメリカ 2011年9月25日～2012年6月24日
大衆文化におけるアメリカの日本化と日本のアメリカ化についての研究 (伊東信宏教授受入れ)
- チェ ウンジュ
4. 崔 恩珠 (Choe Eunju) 韓 国 2011年10月1日～2013年9月30日
在日大韓基督教会に関する資料調査および研究 (川村邦光教授受入れ)
- ラヘル アルベック ギドロ
5. Rachel Albeck Gidron イスラエル 2012年2月15日～2012年8月15日
「近現代哲学における虚軸としてのスピノザ」での研究協力 (上野修教授受入れ)
- ソウ ゲンリン
6. 曹 彦琳 (So Genrin) 中 国 2012年4月～2013年3月31日
現代日本語における限定表現のメカニズムに関する研究 (工藤真由美教授受入れ)

7. フース ハラルト
Fuess Harald ドイツ 2012年3月18日～2012年4月6日
日本近代文化経済史の研究（竹中亨教授受入れ）
8. キム ムンキョン
金 紋敬 (Kim Moonkyoung) 韓国 2012年5月1日～2013年4月30日
日本書紀古訓の研究（岡島昭浩教授受入れ）
9. パク スヨン
朴 秀娟 (Park Sooyun) 韓国 2012年4月1日～2013年3月31日
南米における韓国系移民の言語接触に関する研究（工藤真由美教授受入れ）
10. クドヤーロワ タチアーナ
Kudoyarova Tatiana ロシア 2012年4月1日～2013年3月31日
現代日本語の略語に関する研究（石井正彦教授受入れ）
11. ジェームス R バレット
James R. Barrett アメリカ 2012年6月21日～2012年7月9日
近現代の米国多民族都市におけるアイルランド系とアメリカ化の研究（中野耕太郎准教授受入れ）
12. シュウ ヘイ
周 萍 (Zhou Ping) 中国 2012年7月1日～2013年6月30日
異文化コミュニケーションと文化習得に関する研究（青木直子教授受入れ）
13. チュア スー ボン
Chua Soo Pong シンガポール 2012年7月28日～2012年10月27日
アジアにおける近現代伝統演劇の比較研究（永田靖教授受入れ）
14. レベッカ マック
Rebecca Mak ドイツ 2012年7月20日～2012年7月25日
三島由紀夫研究、「英霊の声」の作品構造を読み解く（入江幸男教授受入れ）
15. タナカ キャサリン マリー
Tanaka Kathryn Marie アメリカ 2012年8月7日～2014年10月6日
ハンセン病と現代日本文学（出原隆俊教授受入れ）
16. アロカイ ユーディット
Arokay Judit ハンガリー 2012年10月4日～2012年10月10日
日本における翻訳方法の文化史：「文化の翻訳」の理論的考察（入江幸男教授受入れ）
17. マーティン ベンジャミン ジョージ
Martin Benjamin George アメリカ 2012年11月19日～2012年11月30日
Euroculture Programme によるEU圏内から本学への派遣学生の指導。
第二次世界大戦期における欧州と日本の政治・文化に関する資料調査と講演（堤研二教授受入れ）
18. ロウエル ジェイ
Rowell Jay イギリス 2012年11月2日～2012年11月14日
Euroculture ProgrammeによるEU圏内から本学への派遣学生の指導（山上浩嗣准教授受入れ）
19. ヴェッキアート アントネッラ
Vecchiato Antonella イタリア 2013年1月18日～2013年3月30日
使役構文に関する研究（金水敏教授受入れ）
20. リュウ ケイヘイ
劉 継萍 (Liu Jiping) 中国 2013年3月1日～2013年8月31日
日中文化の比較研究（川村邦光教授受入れ）
21. クレーマ ハンス マーティン
Krämer Hans Martin ドイツ 2013年3月1日～2013年3月14日
明治初期における「宗教」概念の誕生-島地黙雷のヨーロッパ体験を中心に（飯塚一幸教授受入れ）
22. ウテノー アーサー ベッティナ
Wuthenow Asa-Bettina ドイツ 2013年3月23日～2013年3月29日
広津和郎研究及び翻訳論など（出原隆俊教授受入れ）



小誌は大阪大学文学研究科・文学部の留学生や国際学術交流の主な事項を記録し、広報することを目的としています。各研究室をはじめ、関連する諸方面の状況などお知らせいただけましたら幸いに存じます。

編集・発行 文学部・文学研究科 国際連携室
岡田禎之・西田充穂・内田多鶴
発行日 2013年3月31日

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
<http://www.let.osaka-u.ac.jp>
